

超越論的反省と超越論的観念論：カント的な「内と外」についての考察

玉井, 良和
九州大学大学院：博士課程：哲学

<https://doi.org/10.15017/1430803>

出版情報：哲学論文集. 34, pp.17-34, 1998-09-25. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

超越論的反省と超越論的觀念論

——カント的な「内と外」についての考察——

玉井良和

序 超越論的觀念論への接近

超越論的觀念論の理解に際しての難題であり続けてきたのは、端的に言えば、そこでの「表象 (Vorstellung)」の身分や役割などの論定である。但し、一般にそうした試みが、次の見解に支配されがちな事情はさらに問われてよい。即ち、觀念論という名をもつ体系において論題となる以上、主観的な内部領域が超主観的な外部領域から区別されていることが、表象についての如何なる論議にも不可欠な基礎的枠組を形成するという見解である。一例として『知覚の現象学』序文に従えば、超越論的觀念論とは、世界の事物の実在性についてはこれを遮断して一先ず主観の内側に還帰し、その上でなされる反省的分析によってその主観の内側から諸事物を表象として再導出するとともに、表象の背後の存在としての外部領域をも根拠づけようとする哲学である。そしてメルローポンティは、本来反省とは世界に対する我々の徹底的帰属という事実をそのつど

示すだけの出来事であるという洞察によりながら、觀念性や実在性についてのカントの議論を、世界に埋没しているはずの主観の内においてなされる（内世界的）な空論に過ぎないと非難する。⁽¹⁾しかし、カントの反省は一つの出来事のところで終わるものではない。主観と世界の实在性との遮断を以て超越論的觀念論を解釈し非難することは、超越論的觀念論を齎すカント的反省への誤解に由来するのだ。それを示すために本稿は、前編では、カントの反省が、批判的分析を行うための前提としては寧ろ主観の内外の遮断を予め破棄することを、『純粹理性批判』の「付録・悟性の経験的使用と超越論的使用との混同による反省概念の二義性」〔以下「付録」と略記〕における超越論的反省の検分によって提示する。そして、後編ではその考察を、超越論的觀念論についての成文化された主張を最も多く含む同書第一版「第四パラロギスムス」の解釈に活用する。

前編 超越論的反省

【認識批判に臨む態度決定】

「付録」の劈頭でカントは言う。「反省 (Überlegung, reflexio) とは、対象についての諸概念を直接に (geradezu) 獲得しようとして、対象そのものに関与するのではなく、我々がその下で概念を獲得し得る主観の条件を何とか発見しようとして、前もって (zuerst) まさにそのこと(対象の概念を獲得するというそのこと dazu = von ihnen Begriffe zu bekommen) を取り扱おうとする心構えである。反省とは、我々の相異なる認識源泉に対する与えられた諸表象の関係を意識することであり、それら表象の相互関係はただこの意識によってのみ正当に (richtig) 規定され得る。後に続く (weiter)、表象についてのあらゆる論議にとって第一の問題は、諸表象がどの認識能力 (Erkenntnisvermögen) において関係するのか、諸表象が結びつき比較されるのは悟性におけるのか感官におけるのか、という問いである」(A260/B316)。この叙述は「付録」を完全集約した概要であり、ドイツ語を記した諸表現に注意して以下の三つの要件を看取すべきである。第一点は、ここで真

先に名状されている、対象認識と反省との相違である。反省とは対象についての概念(觀念)の獲得ではなく、その獲得について考察するための態度であることが示唆されている。第二点は、概念獲得についての認識論的考察と反省との相違である。主観の条件の発見や、表象についての後続する論議とは、我々の対象認識についての批判的考察(つまり「原理論」)であり、その前にふまえておくべき予備段階として反省が位置づけられている。そして第三点は、対象認識でも認識批判でもない反省とは何かの説明である。但し、ここでの「与えられた表象」とは、第一点や第二点の趣意を受けて「いずれ批判される表象」というほどの意味に過ぎない。カント的な反省とは、そうした未批判の諸表象が如何なる認識能力と係わっているのかの判別である(後に論じるが、表象の帰属先が予め用意されている必要はない)。

この抜粋箇所は次のように続く。「多くの判断は、習慣から採取されたり、傾向によって出来る。しかし、反省が先立ってなされず、また後からせめて批判的になされもしないので、そうした判断は悟性(知性)にその起源をもっていると考えられるのである」(A260f./B316)。摘記されていることは読み取りやすい。先ず前半でロックを意識しつつ、事物認識の反覆や、経験的に指摘し得る諸条件の下にある認識者の性向にその起源を求め得る判断について述べている。そして後半が示唆しているのは、然るべき反省を欠いた認識論が立ち到る仕儀、即ち、我々の認識に関する事柄一切は、知性(understanding, entendement)の性格如何にのみ依拠すると見なすことである。以下、先の第一点と第二点とに留意しながら、カントにとつてのロック及びライプニッツの立場をそれぞれ瞥見する。

【経験的反省】

判断が反覆や性向に由来するというロックの主張は、時間の経過に従って継起した経験的判断が物的または心的な諸々の事物(thing, res)に関する認識であるという事実を再確認する観点から発せられる。こうした追認を経験的反省と呼ぶことにする。ところで、生起した対象認識の各々を一つの事実として捉え直し、それらの指定する諸対象を示すこの反省も、しかし再び反省が行われると、自身の捉えた諸認識と同じ時間経過上に生起した一事実と見なされる。従って、経験的反省と

しての如何なる考察も可能な経験のうちにあり、自らの基盤として他のより基本的な対象認識(経験)を——もしあれば——要求せざるを得ない状況へと回帰するのみである。先述した第一の要件、即ち反省は対象に関わらないという要件が棄却された場合の難点と言えよう。

そこでロックは、知性の直接的対象たる諸観念を心の内部に想定し、それらの発生や発展を恰も観察的実証的に記述し得る事実の如く見なすことによつて、時間的に最も先行する基本的経験を提示する。即ち、タブラ・ラサとしての心への單純観念の印銘であり、これを以て、受容性という知性の性格に経験の原初的な端緒が求められる。しかし、認識成立の事実問題(quaestio facti)の主眼を、物的事物や心的過程についての諸認識が時間的に相前後して生起したという因果的連関から、観念の獲得における因果的連関へとすり替えるのは不当である。前者は、経験的反省が事実として捉え得る経験的諸認識の間の関係であるが、後者は、認識する事物(心)と認識される事物との間の前経験的に想定された関係だからである。

心的過程が経験的に認識されるという事実は反省されても、観念の発生する内部を心がもつことの経験的認識などはもとより事実として確認できない^⑦。経験の対象を物的事物と心的過程とに二分できるのは、感覺的認識と内省的認識とを経験的反省によつて対置することに基づくのであり、決してその逆ではない。それ故、物的と心的という分類は、諸物と心とがそれ自体で、対象認識としての経験的反省から独立してもつ関係であるとは見なせない。

だが、経験の対象の相互関係が経験的反省の可能に由来することは、看過できぬ糸口を与える。経験的反省が畢竟するに、我々の習慣を組成している対象認識の反覆生起と異なる以上、この関係を否認すれば、対象認識が如何にして成立するかという抑もとの問題提起を論題ぐるみ反故にすることにならう。経験的反省はそれ自身も対象認識となる故に、心の内部観察という局面への転進を挫かれるが、この挫折こそ、「経験的認識一般の可能性の条件が、同時にまた、経験の対象の可能性の条件である」(A158/B197)という着想を与えるとともに、何が探究されるべきなのかを改めて示唆している。即ち、経験的反省自身の成立根拠である。

【経験に訴えない反省】

以上から、反省される経験的諸認識の相互連関に、それらを取り沙汰する反省的考察自身も参与することを防ぐ、哲学的認識論のためのより根本的な反省的態度が要求される。これに応じるには、内部認識と外部認識という仕方でも分類される経験的認識一般の成立を非経験的に問わねばならない。

本有觀念の否定に対するライプニッツの抗論は、経験的反省によつては覗き見ることのできない心(魂)の内部を提供している⁽³⁾と解し得る。しかもこの内部とは、それ以上の内部への遡行を許さぬ不可分な実体の内部として前提されている。ライプニッツは彼のこの実体観に基づき、ロックにとつての感覺的認識も内省的認識も総じて知性の内観的活動であること⁽³⁾を主張し得る。一切の表象が一樣に単なる概念として知性に帰属すると断じ、モノド主観の内部のみに対象認識の根柢を求めるライプニッツのこうした態度をカントは論理的反省と呼ぶ。

これに対してカントは自身の反省を超越論的反省と名づけ、「表象一般の比較を、その比較がなされる⁽⁴⁾ところの認識能力(Erkenntniskraft)と対照させ、諸表象が純粹悟性或いは感性的直観のどちらに属するものとして相互に比較されるのかを判別する働き」(A261/B317)として定式化する。その判別としての超越論的反省は、表象が相互に一对をなして関係する仕方を表わした、反省概念と呼ばれる四組の対概念——「同一・差異」「一致・反対」「内的なもの・外的なもの」「規定され得るもの・規定(質料形式)」——の各々に対応するライプニッツの諸原理の点検を通して実施される⁽⁴⁾。ここでは、「内的なもの・外的なもの」という対概念を取り上げ、それに関するカントの考察の趣旨を簡略に検討する。

【論理的反省における「内外」】

論理的反省に従えば一切の表象は単なる概念であるから、各モノドが他を常に表象する場合の認識対象を、カントは純粹悟性の対象であると見なして次のように指摘する。「純粹悟性の対象に関しては、それと異なった或る何かとは全く関係をもたぬもののみが、内的なもの⁽⁵⁾である。これに対して、空間における現象的実体の内的規定とは(それらの)関係において他

になく」(A265/B321)。だが、ライブニッツの言う内的規定が、空間における諸対象に適合しないことに、彼が痛痒を感じる必要はないかもしれない。というのも、魂(実体)の内に觀念の本有性を主張するときの認識論的着眼目は、一切の経験的な対象認識の成立がこの反省的見解に基づいて体系的に根拠づけられるという点に置かれてからである。しかし、カントが指摘しているのは他ならぬその見解が抱える難点であり、それはライブニッツ的内部に随伴する外部の歓迎し難さにおいて発覚する。

ライブニッツ的外部とは無論モナドの外部でしかない。実体は他の実体との影響関係をもたない(モナドの無窓性、『モナドロジー』第七節)というのが彼の基本テーゼであるから、純粹悟性の認識対象である各モナドは内的規定だけを以て実在し、その外部には如何なる関係も要しない。モナドの外的相互性が予定調和と言われる所以である。だが、経験的に規定認識された諸対象の場合には、互いの関係が、それら対象の認識への経験的反省によって常に示され得る。しかもその関係の成立は、経験的反省もまた対象認識として成立し得ることに由来した。それ故、経験的反省もモナド主観における純粹悟性の内観的活動であれば、それが示す諸対象の関係は、悟性の対象の多元性を表わす予定調和と齟齬を来す⁵⁾。

経験的反省では正当に獲得し得ない心の内部を探索する論理的反省とは、それ自身が対象認識となることはない。従って、経験に依拠せずに認識の成立根拠を問ひ得る形而上学的な観点への移行をライブニッツは遂げている。但し、彼の「内外」も、認識の成立を立論する構図を「心の内外」として一義的に表わす点ではロックの場合と共通する。しかも、論理的反省の着眼目は、経験的反省の示す諸事実の否定にはないのだ。⁶⁾にも拘わらず、またそれ故にこそ、実体内部に求められる認識のアプリオリな根拠が同時に認識対象の實在性のアプリオリな根拠と見なされ得るライブニッツ的体系の美しさが、経験的反省の示す認識対象間の関係を切断し、却って、その関係の成立に相等しい、経験の成立という不可侵の事実を握り潰してしまふ事態は無視できない。心の内部を観察するという反省が、認識批判の準備に留まることを要請した第二の要件に抵触する点を以て、この障碍のカントによる回避法を推せば、それは彼の第三の要件、即ち認識能力の判別にあると思われる。

【超越論的反省における「内外」】

「心の内外」という構図の上に受容的な知性の能力が案出されたロックの場合に対して、同様の構図の上にモナドの多元性が現出するライプニッツの場合、諸実体には、宇宙の活ける鏡として各々の視点から他を表象する自発的な力を備えていることが要求される。モナドの「内的實在性に相当する力」(A265/B321)である。従つて、対象認識に関与する一切の表象とその状態は、この根源的な力からの派生としか見なされない。即ち、「ライプニッツのモナドロジーは、内的なものとの外的なものとの区別を、この哲学者がただ悟性との係わりにおいてのみ考えていたことの他には基づくところがなく」(A274/B330)。このように、「内外」を「心の内外」として固定するロックとライプニッツの甲論乙駁はその焦点を知性の性格について結ぶ。つまり、認識能力の捉え方やその性格は、反省概念の意味の解し方次第で決定されるのである。

ここでカントが「内外」という対概念を如何に扱っているかに着目せねばならない。彼の「内外」とはロックやライプニッツの場合のように認識論的構図を表示する基礎概念ではなく、終始一貫、諸表象を比較する指標(比較概念)としての役割しかもたない。反省概念とは、比喩的に言い換えれば、相互に還元できぬ表象源泉を識別するためのリトマス指示薬に過ぎないのである。そして、「心の内外」という同じ構図の上に、対象認識の成立の仕方として呈示された二つの基本サンプルに対してこの指示薬が異なる色を呈すること——表象の比較概念がその意を異にすること——は、対象の経験的認識(ないし同じことだが経験の対象)が、或るアプリアリオリな構造をもっていること、即ち表象の帰属先である認識能力には二者があることを示している。このように、空間における経験の対象間の関係との対比において、純粹悟性の対象間の関係(調和)を検証する超越論的反省とは、経験的観察はもとより独断的アプリアリズムによつても捉えきれなかつたこの構造をいわば可視的に示すための思考実験であり、空間的關係を示す経験的反省と、予定調和に基づく論理的反省とはその実験に不可欠な題材なのである。ライプニッツの諸原理についてのこの実験によつて、自発的悟性の働きには還元されないが、しかし単独には認識を成立せしめないという意味では非ロック的な受容能力の効能、即ち感性的直観が検出される。つまり、認識批判の過程

における「感性論」の必要が発見されるのである。⁽⁸⁾ ロックとライブニッツへのカントの評価は次の通りである。⁽⁹⁾ 即ち、「二つの全く異なる、しかし、それらの結合においてのみ物についての客観的に妥当な判断をなし得る表象の源泉を、感性と悟性において求めず、これら二人の偉大な人物は、各々の見解に従って物自体に直接に関係するとされる、それらのうちの一方だけに固執し、それによって他方はただその表象を混雑させる或いは整理するものに過ぎないと見なしたのである」(A271/B327 強調カント)。

しかし、超越論的反省とはあたら論理的反省の目論見を完全に破棄することではない。対象認識の成立を認識の能力へアプリオリに根拠づけるというライブニッツの方針を維持するための選択肢は、まだ一つだけカントに残されている。「物についてアプリオリに何事かを判断しようとするならば、決して放棄し得ぬ義務」(A263/B319)として、ライブニッツの意味もロックの意味も共に無効とせず、寧ろ積極的に反省概念に両義性を認める途である。但し、それによって認識能力を判別するカントの反省は、次のような刮目すべき効果を認識能力の批判過程に齎すであろう。即ち、認識する事物と認識される事物、或いはモナドとモナドという対立の枠組に応じ、認識能力を実体的な何かに内属させて捉えることの断固たる拒絶である。さらに言うと、「内外」関係によって認識が方向づけられる(翻弄される)べきではなく、哲学的認識論こそが対象認識の成立における正しい「内外」の意を決定するという構想の転換である。

後編 第一版「第四パラロギスムス」における超越論的観念論

【超越論的実在論と経験的観念論における「内外」の用途】

ここで視線を転じ、前編での考察を活用して、第一版「第四パラロギスムス」を解釈する。状況を略述すると、先ずそこでの課題とは「外的感官の一切の対象の現実存在は疑わしい」という懐疑的主張の正否の吟味である。そしてこの主張が導

かれるのは、外的現象の現実存在がその知覚の原因への推論よつてのみ知られると見なすときであり、これに抗して外的対象が推論を要せず直接に認識されると見なすのは二元論である。そしてカントは、問題の懐疑への叛服を、超越論的觀念論と經驗的觀念論という二つの觀念論によつて表わし、さらに、自身の立場である前者には經驗的實在論と、懐疑論の立場である後者には超越論的實在論と提携させている。

私見によると、超越論的觀念論を以てする、經驗的觀念論の攻略は、外的対象を直接に認識できるかという係争問題にある二つのキータームのうち、「直接性」よりも寧ろ「外的」という表現に照準を合わせている。その場合に決定的な手がかりとなるのは次の叙述である。即ち、「我々の外」という表現は、避け難い二義性 (Zweideutigkeit) を伴う。この表現においては或る場合には物自体として我々から切り離されて存在する何かが、また別の場合には単に外的現象に属する何かが意味される」(A373 強調カント)。そして、二つの意味の混同を予防するためにカントは「經驗的に外的な対象を、空間において見出される物と端的に名づけておくことで、超越論的な意味で言われる対象から区別する」(ibid. 強調カント)と述べる⁽¹⁰⁾。この「外的」という表現が、空間における対象と超越論的物自体のいづれをも意味し得ることを示したのは、經驗的反省と論理的反省とを対照させる超越論的反省に他ならない。そして、三様の反省の成果を按ずるに、カントが「内外」を駆使して表現している超越論的實在論と經驗的觀念論、及び超越論的觀念論は概ね以下のように把握できると思われる。

先ず、超越論的實在論者は「外的現象を、我々と我々の感性から独立して実在し、それ故に純粹悟性概念に従つて我々の外に存在するような物自体と見なす」(A369)。これは、論理的反省に基づくライプニッツ的な見解であると言えよう。また、經驗的觀念論者は「感官の対象が(超越論的實在論者の言う意味で)外的であるのだとすれば、それらは感官がなくともそれ自体で実在するはずだと誤つて前提し、そうした観点から、感官の表象はその現実性を確実とするには不十分だと見なす」(ibid.)。ここに述べられていることは、經驗的反省を心の内部へ持ち込み得ると誤つたロックが、その内部に觀念を想定した場面に酷似している(この懐疑的主張については、仮令ロックが唱えずとも、寧ろ逆に彼の抱える難点として指摘し得る)。

ここで肝要な点は、超越論的実在論者が「心(我々)の内外」という枠組をもつ一点においてのみ経験的観念論者と提携することである。だが、コギトによって確実性を保証された心の内部にのみ居を構える経験的観念論者は、他ならぬ自らの基礎的枠組の故に心の外部への到達の承認に躊躇せねばならない。

【内外】の二義性と超越論的観念論】

これらに対する超越論的観念論の定義を逐語的に解していこう。「総ての現象の超越論的観念論」という名の下に私は次の学説を考える。即ち、現象を総じて物自体としてではなく単なる表象と見なし、これに即して、時間と空間とを、物自体としての客観の独立に与えられた規定ないし制限ではなく、我々の直観の感性形式に過ぎぬとする学説である(「A369」)。「総ての」と言うことで——感覺的認識の対象も、経験的内省の対象も含めた——経験的に反省され得る一切が遺漏なく考察されることになる。但し注意が必要なのは、それが経験的对象ではなく「現象(Erscheinung)」と呼ばれている点であり、ここには、超越論的反省の成果を考慮せねば必ず嵌まる陥穽が口を開けている。

現象とは「経験的直観の未規定な対象」(A20/B34)であり、直観とはその経験的觀察(反省)が原理的に不可能な、経験的認識の構造の成素である。そして、この成素を感性の表象として、別の成素(悟性の表象、即ち概念からアプリオリに区別し得るのは、論理的反省ではなく超越論的反省だけであった。概念的に規定されていない以上、多様な何かでしかない現象は、理解可能な内容をもつ経験的認識との相等性を未だもたない。現象はこの点で経験的对象とは異なる。それ故にカントは現象を「単なる」表象と呼ぶのである。この現象をして、論理的反省が心の外部に要求するところの「物自体」と取り違える超越論的実在論を主張すれば忽ち経験的観念論の枠組に陥るに至り、感性の役割をそこで如何に解釈しようとも、その対象の認識の直接性に対する懐疑は避けられない。それ故、現象は「表象」と見なさねばならないが、それが心の内部への位置づけを意味するのであれば、「心の内外」という枠組は依然として存続し、その外部に纏わる困難は解消されない。

だが、超越論的反省に基づけば、「内外」の意を二通りに定め得る。カントが次のように言えるのもそのためである。「……

經驗の対象は、空間において表象される場合には外的対象、ただ時間関係においてのみ表象される場合には内的対象と称する。しかし、空間と時間のいずれも我々の内にも見出される」(A33 強調カント)。ここで經驗的对象を分類しているのは經驗的反省における意味での「内外」であり、また、時空の觀念性を示しているのは、論理的反省が純粹悟性の対象と呼応させて前提した「内部」に他ならない。外部の避けられぬ二義性が当然にして齎すこれら二つの内部の意味を、どちらも考慮しなければ、この文言はあまりに不可解となる。それ故、ここでの時空の觀念性とは、時空が専ら直観という認識要素のみに位置づけられることだと解さねばならない。時空が「感性形式」であることが、現象の単なる表象たることに「即して」という先の定義中の表現も、またこれと同様の解釈を要する。

右の引用部でカントが強調しているのは、共に直観の形式に基づく一對の内と外とに不平等がないという点であり、超越論的觀念論はこれによって二元論となる。それ故、カントの二元論を、確實性の格差を示す「心の内外」という名の隔壁が感性表象と対象との間に存する枠組と混同してはならない。これまでの整理として、補筆した(A370f.)を提示しよう。「外的事物は、(經驗的觀念論がコギトを以て絶対視する)私の自己が実在するのと同じ仕方、で実在する。しかも両者が実在するのは、(經驗的觀念論が「自己」の表象について主張するように)私の自己意識(Ich denke)の直接的な証拠による。それらが異なる点(即ち、内外という分類の所以)とはただ次のことに過ぎぬ。即ち、思惟する主観としての私の自己の表象(即ち内的現象)は(時間を形式とする)内的感官だけに關係させられるが、延長する何かを表わす表象(即ち外的現象)は(空間を形式とする)外的感官にも關係させられるということである。私の内的感官の対象(私の思惟)の現實性について推論を要しないのと同様にして、外的対象の現實性についても推論する必要はない。(現象であるという点で両者は同じだから)」

(一) 内カント)。

【「内外」という境界なき觀念論へ】

残った課題は、經驗的觀念論に与さぬ仕方、で表象を論定することである。外的關係の觀念性についての誤謬推理は、「内外」

の意をその避けられぬ二義性にも拘わらず「心の内外」として一義的に固定し、対象認識を単独に成立させ得る能力を案出することにその端を発している。こうして確立された枠組における表象とは、心の内部に存する観念 (Idea, idee) として解さざるを得ない。そして、その表象に係わる認識能力は、果然、自らを心という実体としての主観に属すと見なすとともに、経験的であれ超越論的であれ物自体として実体化された何かとの関係を求めて止まないであろう。ところが、観念を通じたその関係の成立を以て対象認識の成立を主張することを阻むのは、主客の各々を実体として対置するその基礎的枠組であった。他方、カントの場合の表象——「付録」の冒頭部で、それについての一切の論議に先立つという超越論的反省に「与えられた表象」とは、直観 (Anschauung) と概念 (Begriff) である。これらはいずれも経験的認識の成素であるが、心と対象の間を取り持つ媒介者などではない。というのも、それらが表象と呼ばれる枠組を表わすために「内外」は要らず、逆に感性与悟性という場¹²⁾が指定されなければ、この対概念の意味もまた不定だからである。そして、超越論的反省によって感性を悟性から区別し、異なる「内外」の意を齎すそれらの協働を以て経験的認識一般の成立を主張する限り、また両者が共に属し得る内部をもった心という実体・主体はあり得ない。

感性はその形式たる時空によつて、ただ現象一般を内的現象と外的現象とに(延いては現象より成立する対象経験一般を経験的内省と外的経験とに)分類するのみである。しかも、このことすら、自発的能力が働いているからこそ発見された非自立的な所為であった。従つて、受容能力と称されるとはいへ、感性には「内外」という境界線を以て、自身の働きにそれ自体として正対する何かを想定する権能はない。それに対して悟性は自発的な能力として感性との協働を拒み、「内外」を以て「心とその外」の対立という枠組を描き得るかもしれない。だが、経験的認識が成立する場面においては、協働する感性における「心とその外」の意味——感性に許される限りでの意味としての「内的現象と外的現象」に過ぎないが——が既にある以上、悟性は「内外」に同じ意を求めるのを断念せねばならない。

時空をライプニッツ的な意味での内的規定もしくはその派生ではなく単なる感性的直観の形式として、超越論的実在と一

対をなす内部に位置づける主張は、二つの効果を合わせもつ。即ち、「心の内外」を以て超越論的實在論を主張したがる悟性が感性を無視することの抑止と、超越論的實在論に伴う主観の実体化の禁絶である。従って、カントが直観と概念とを表象と称しても、その下地に「心の内外」はない。一旦その枠組を共有すれば、経験的觀念論は論駁できない。だからこそ、彼は超越論的實在論との折衝点を外的認識の直接性ではなく時空の位置づけに選ぶのであり、その目論見とは「内外」の二義性を以て、いっそ、懐疑の因をなすそのデカルト的枠組そのものを惜しげもなく根絶やししておくことなのである。

【表象と超越論的觀念論】

最早、時空の觀念性とは、直観の形式がただ感性という能力と不可分にあることだけを述べているとしか解せない。すると超越論的觀念論とは、人間理性が自身の能力について語るための枠組だと思われるが、感性や悟性の働く仕方を直接に視認する——いわば剥き出しの理性能力を顕現させる如き反省はもとより不可能である。ところが、直観や概念を表象と呼ぶことはそれ故に至当となる。「心の内外」を枠組にもたぬカントの探究が主観的表象を通して向けられるのは、それが表現する (represent) 対象などではあり得ない。彼は表象の分析によってそれに係わる能力の働き方を探求するのだ。ロックは「眼」という比喻を用いて、知性が心の内に自身の働きを見えるという魅力的な着想を示した。今、超越論的反省によってデカルト的枠組から脱却したカントは¹⁴⁾、認識能力がそこに案出される事物としての心や可想的実体の内部に立脚することによってではなく、純粋な理性 (Vernunft, reason) の能力だけにとつての觀念論を主張する¹⁵⁾。

そして、カントの表象分析の手段もまた「付録」に提示されていた。「質料形式」という対概念の活用である。カントは実際、この反省概念に「他の(二つの反省概念を用いる)反省がみな基づいている」(A266/B322)と見なしている。現象を成立させる形式(時空)の解明と、その未規定な対象をさらに規定する形式(カテゴリー)の演繹、そして二種の能力の統一など、カントの形式探究の実施を迫うことは果たし得なかったが、本稿はその企及し得るところとして次の見解を提出したい。即ち、直観と概念という相異なる成素が可能的経験を成立させる仕方をその形式に尋ねる「感性論」と「分析論」と

が、我々人間の認識活動が総じて理性という無形の能力のなす業であることを超越論的反省によって捉えた成果、即ち超越論的観念論という枠組において論じられていることは間違いない¹⁷⁾、と。

結論と遠望 人間理性と超越論的実在

主客の絶縁という採め事を以てするカント批判は、主観の内外という設定の自覚的断念を促す超越論的反省への無理解による。すると「表象(また *in uns* や *wir*, *unser*, *Gemüt* など)」というチームは一見不適切に思われるが、超越論的反省の齎す超越論的観念論とはそれら表象の形式を通して窺うべき認識論的枠組、即ち、純粹理性が自身の働きの形式において自己批判を行なう枠組である¹⁸⁾。経験的認識一般とその対象とが成立条件を同じくするという洞察も、この枠組において解されねばならない。条件を同じくするとは、各々の成立そのものが同じ一つの事柄であることを意味する。だからこそ、そこに成立条件としての形式が求められるのである。もしカントの趣意を、認識能力の客観的妥当と認識対象の経験的実在とが心の内と外とで成立するために従う各々の条件の一致だと解すれば、抑も形式探究のあるべき様はない。

では超越論的観念論によって経験的な外的認識(対象)の成立の仕方が証示されるとしても、超越論的な対象に関する問題意識はカントに幾ばくもなかつたのかという反問もあろう。だが、本稿のような超越論的観念論の解釈が、そうした対象をカントから抹消することに繋がるとは思われぬ。超越論的観念論において物自体を記述不可能と見なさねばならないことは、その端的な否認を意味しない¹⁹⁾。斥けられたのは、いみじくも「弁証論」の直前に付置された「付録」の題名を用いて言うならば、概念を以て思惟する能力の経験的使用と超越論的使用との混同によって、心の外部の対象についての内容ある判断が得られると見なす推論能力の錯誤に過ぎない。経験一般を成立させる諸能力についての論議、即ち形式探究が「心の内外」という枠組を容認しないとしても、純粹悟性の知られざる対象が、まさに経験の成立するその場面に、心の外部とは論

定できぬ何らかの仕方でも参入していることまでは斥けられない。さもなくば、それを志向する悟性、即ち、実在性・実体性・因果関係などを有する経験的諸事物の世界に遍く拡がり亘っている思惟能力が抹消されるからだ。この抹消はとりもなおさず理性の自己否認という背理である。

註

『純粹理性批判』からの引用には Philosophische Bibliothek 版を用い、引用箇所の第一版と第二版における頁付を (A/B) という表記で示す。引用文におけるカッコ内の補足、傍点による強調は、断りのない限りは筆者によるものである。また「原理論」とは「超越論的原理論」の略記である（「感性論」「分析論」「弁証論」も同様）。

- (1) v. M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Paris, 1945, Avant-Propos, p. iv, vi, viii.
- (2) 『人間知性論』における reflexion とは、感覚的認識に対置されるものでしかなく、やはり「内省」と訳すのが相応しい（著しい一例を挙げるならやはり有名な二巻一章一節であろう）。しかし、しばしばボイルの微粒子説の影響を指摘される、心における atomism とは、正当化を求められる経験的な対象認識についての理論的仮説とすら見なせない。historical plain method を旨とすれば、諸観念の compositionality を扱うこともまた、経験的記述でなければならぬからである。経験から得られ、また経験の成立に不可欠な観念を、経験的認識に過ぎぬはずの内省によって観察・記述することの可能は考え難い。他の解釈を以て擁護する向きもあろうが、本稿ではこの点のみに限ってロックの反省法の遜色と見なす。cf. M. Ayers, *Locke: Epistemology & Ontology*, vol. I, London, 1991, pp. 17-8.
- (3) 『人間知性新論』（テキストは Gerhardt 版ライプニッツ哲学著作集第 V 巻）特に S. 96.
- (4) 言うまでもないが、反省概念とはこれら四組の比較概念 (conceptus comparationis) が反省に用いられた場合の呼称であり、何らかの反省によって得られた概念ではない。

- (5) 実際『人間知性新論』では、観念に係わる知性の性格についてフィラレント（ロック）とは異なった見解をもつテオフィル（ライプニッツ）が、互いの「内外」に生じる意味の相違を指摘している。S. 71.
- (6) ロックの真意はともかく、内省による観念の獲得を、寧ろ自らの本有観念説に通ずるものとしてライプニッツは評価していると思われる。『人間知性新論』S. 45, 46, 77.
- (7) 従って、スミスのようにロックとライプニッツの扱いが偏頗であると指摘するのは、カントにとつての両者の反省の意義を理解していないからだと見える。ロックの事実問題へは、カテゴリーの演繹という然るべき箇所（A86f./B119, A94/B127f.）において言及・批判されている。なお、本稿における「経験的反省」とは、同文脈中（A85/B117）§durch Erfahrung und Reflexion über dieselbe（と）う表現をもとにした。cf. N. K. Smith, *Commentary to Kant's Critique of Pure Reason*, 2nd ed., 1923, reprinted, Atlantic Highlands, 1995, p. 421.
- (8) プラウスも「形式と質料」を中心に、直観と概念の超越論的区別を齎すのが、現に経験が成立しているという事実へ向けられる超越論的反省であることを強調しているが、ロックのまたはデカルト的な見解をとりわけ真偽という点から批判するなど、「付録」の積極的な内容解釈を用いずに超越論的反省の意義を示している。vgl. G. Prauss, *Erscheinung bei Kant*, Berlin, 1971, S. 58ff. 62.
- (9) 「付録」の「ライプニッツは現象を総じて知性化した」（A271/B327）という叙述に対し、パーキンソンは感覚と概念とについての二つの論点を以てカントを批判しているが、いずれもカントの趣旨を完全に誤解したものである。先ず、ライプニッツにおける感性と悟性の区別は表象の判明度の程度差に過ぎないと見なす（この見解が言明されているのは実際には「感性論への一般的註」なのだが）カントに対して、パーキンソンは、'distinct' と 'confused' というタームをライプニッツは感覚のみならず思惟に対しても異なった仕方を用いるのでカントの批判は妥当でないと言う。しかし、'distinct' と 'confused' は、感性と悟性を区別するための反省概念ではないし、反省概念による判別とは認識能力の超越論的区別である（vgl. A44/B61f.）。従って、カントを論難するのであれば、「内外」などの反省概念がライプニッツにおいても二義的であり、それに伴って *vis primitiva* に還元されない能力があると主張するか（無論これはできないだろうが）、もしくは超越論的反省そのものを無効と見なすべきであろう。次に、ライプニッツによる経験的認識の正当化とは、主語概念による述語概念の包含を感覚的経験に依拠して提示することである故、彼を

- 経験の軽視者と見なすカントは間違えているとされるが、寧ろカントは論理的反省が経験に依拠しない点を肯定的に評価しているのだ。cf. G. H. R. Parkinson, "The 'Intellectualization of Appearances': Aspects of Leibniz's Theory of Sensation and Thought", in R. Woolhouse ed. G. W. Leibniz Critical Assessments, vol. IV, London, 1994, p. 80, pp. 82-3.
- (10) ムーアもこの叙述に着目している。しかし、カントの「内外」を「心の内外」と混同したり、また「経験的に外」「空間において見出される事物」そして「超越論的に外」を、超越論的反省を無視して解している。認識能力を判別するだけの「内外」を、専ら日常言語における用例に照らして吟味することは、カント解釈としてはひどく誤っていると云わざるを得ない。cf. G. E. Moore, "Proof of an External World", in his *Philosophical Papers*, London, 1959, pp. 129-30, 138-40.
- (11) カントの 'blos' には、ただネガティヴに「〜に過ぎぬ」と解すべき用例に加え、「或る対応者との確定した関係から単離された」というニュアンスの強い用例も多くある。例えば「単なる概念」であれば直観との、「単なる形式」であれば質料との対応が考慮されている。従って「単なる表象」の場合、それが直観(ないし現象)と概念のいずれであるかに注意せねばならない。久保元彦『カント研究』一九八七年 創文社 一三・一四頁。またカントが、頻繁に 'bloÙe Begriffe' を用いて論理的反省に言及したり、それがただ表象を比較するだけであることを指摘するのは (A262/B318, A279/B335) 表象一般を扱う能力が概念の能力しかないことを示唆しているのである。
- (12) 「超越論的場所 (transzendentaler Ort)」とカントは呼ぶ (A268/B324)。
- (13) 前節で引いた (A375) の直前に「こゝでは超越論的対象ではなく経験的対象が問題となる」とカントは念を押している。
- (14) 実はデカルトも懐疑の各段階で、存在を把握する諸能力を比較によって提示している。形式探究の意義を齎す超越論的反省との対比は興味深い論議となろう。根井豊「デカルトの存在把握」『哲学雑誌』no. 102, 一九八七年 特に四七―八頁。
- (15) ストロソンも「内外」を一義的に固定した枠組において現象に対置させた実在を、超越論的觀念論の解釈に持ち込んでいると言える。その自己批判が超越論的觀念論となる純粋理性は(その内外や、誰かの所有になることを言われ得るような)心ではないとする本稿の見解と彼の解釈との戦端は、カントではなくストロソン自身がなしたその対置から開かれ得るだろう。cf. P. F. Strawson, *The Bounds of Sense*, 1966, reprinted, London, 1993, pp. 196-7, 236, 238-9, 248-9, 250. また、この点

については、反省の事實的側面だけを以て意識を徹底的に純化するサルトルの自我の排除法も関連すると思われる。V. J.-P. Sartre, *La transcendence de l' Ego*, Paris, 1965, pp. 24-5, 28-9, 31-2. これらの検討には他日を期したい。

(16) 断言は控えるべきだが、「感性論」の「空間の形而上学的解明」の各々は反省概念と強い親近性をもっていると思われる。

(17) これは、形式探究と超越論的觀念論とが隔絶しているという見解への反論である。久保論文「内的経験」に於て超越論的觀念論が脆い枠組になるのは、超越論的反省の成果を顧慮せず、内外の一義的な対立という枠組を経験的觀念論と共有させるからである。氏が (A372) から引用する叙述も、「内外」の二義性を認めれば、本稿二七頁で引いた (A373) のように読むことができる。批判過程におけるカントの思索の軸に形式探究を据えるべきだという氏の主張には異論の余地が全くないが、超越論的觀念論をそのために切り捨てることはできない。久保元彦前掲書所収「内的経験 (二)」特に一〇〇' 一〇五' 一一〇頁など。

(18) 『プロレゴメナ』で超越論的觀念論が批判的觀念論また形式的觀念論と言ひ換えられている箇所を参照。Kant, *Prolegomena, zu einer jeden künftigen Metaphysik*, Philosophische Bibliothek, Hamburg, 1993, S. 47f., 100.

(19) vgl. E. Adickes, *Kant und das Ding an sich*, Berlin, 1924, S. 129f. 『カントと物自体』赤松常弘訳 法政大学出版局 一九七四年

(本学大学院博士課程・哲学)